

Villalta scale点数表

臨床症状と臨床所見	なし	軽度	中等度	重度
臨床症状(患者側より)				
疼痛	0	1	2	3
こむら返り	0	1	2	3
重だるさ	0	1	2	3
知覚異常	0	1	2	3
搔痒感	0	1	2	3
臨床所見(医療従事者側より)				
前脛骨部浮腫	0	1	2	3
皮膚硬化	0	1	2	3
色素沈着	0	1	2	3
発赤	0	1	2	3
静脈拡張	0	1	2	3
下腿圧迫による痛み	0	1	2	3
静脈性潰瘍	なし		あり	

Villalta scaleの ビジュアルガイド

	なし又は極軽度 0点	軽度 1点	中等度 2点	重度 3点
前脛骨部浮腫	 <p>脛骨の輪郭がはっきりと浮きでて見えている状態。 足首やすねに圧痕性浮腫は認めない。</p>	 <p>脛骨の輪郭は少し浮きでて確認できる状態。 足首やすねに軽度の浅い圧痕性浮腫を認める。</p>	 <p>明らかに腫脹を認め脛骨の輪郭は見えない状態。 足首やすねに中等度の圧痕性浮腫を認める。</p>	 <p>腫脹が重度で脛骨の輪郭は見えない状態。 足首やすねに深い圧痕性浮腫を認める。</p>
色素沈着	 <p>なし。</p>	 <p>足首周囲に淡い斑点のある茶色がかった色調変化を認める。</p>	 <p>足首とすねの下部周囲に明らかな茶褐色の色調変化を認める。</p>	 <p>足首とすねの下部周囲に暗褐色の色調変化を認め、變つた融合し広範囲。</p>
静脈拡張	 <p>細静脈や静脈瘤を認めない。</p>	 <p>足首または足部周辺に、赤みを帯びたもしくは紫がかった細静脈を少し認める。</p>	 <p>足首または足部周辺に、著明に紫がかった細静脈を認める。</p>	 <p>著明に紫色の細静脈や静脈瘤が数多く合流している状態を足首、すね、または足の他の部分に認める。</p>
発赤	 <p>下肢に色調変化を認めない。</p>	 <p>足または下腿にかすかな発赤を認める。</p>	 <p>足または下腿に中等度の発赤を認める。</p>	 <p>足と下腿に明らかな発赤または紫がかった色調変化を認める。</p>
皮膚硬化(脂肪硬化)	 <p>すね及び足首部分の皮膚に硬化や肥厚は認めず皮下組織や脛骨前面の組織に十分な可動性を認める。</p>	 <p>すね及び足首部分の皮膚に軽度の硬化や肥厚を認め、皮下組織や脛骨前面部と軽度癒着している。</p>	 <p>すね及び足首部分の皮膚に中等度の硬化や肥厚を認め、皮下組織や脛骨前面部と中等度癒着している。</p>	 <p>すね及び足首部分の皮膚に強い硬化や肥厚を認め、皮下組織や脛骨前面部と強固に癒着している。</p>
下腿圧迫時の痛み	 <p>なし。</p>	 <p>痛みあり 患者の訴えとしては痛みの強さは軽度。</p>	 <p>痛みあり 患者の訴えとしては痛みの強さは中等度。</p>	 <p>痛みあり 患者の訴えとしては痛みの強さは重度。</p>
静脈性潰瘍	 <p>潰瘍の状態にかかわらず、あり/なしで分類される。 典型的な静脈性潰瘍は下腿の内側面にできやすく活動性潰瘍と治癒した状態の潰瘍(潰瘍の既往)がある。</p>	<p>注) 所見は人種によって多少異なり 有色人種だとやや明瞭でない場合もある。</p>		

静脈血栓後症候群の評価法：Villalta scale

スコアが15点以上または静脈性潰瘍があれば重症と診断する。

症状

- ①疼痛
- ②こむら返り
- ③重苦感
- ④知覚異常
- ⑤搔痒

所見

- ①前脛骨部浮腫
- ②皮膚硬結
- ③色素沈着
- ④発赤
- ⑤静脈拡張
- ⑥下腿圧迫による痛み

静脈性潰瘍

なし

あり

各項目の評価

なし：0点 軽度：1点 中等度：2点 高度：3点

5～9点

10～14点

15点以上

PTS

軽症

中等症

重症

日本語版静脈疾患指標・評価法

Villalta scale

International Committee of Japanese Society of Phlebology
日本静脈学会国際委員会
福岡山王病院 血管外科
星野祐二

第40回日本静脈学会総会 On the Web 2020年9月18日
シンポジウム4「日本語版静脈疾患指標・評価法
(CEAP,VCSS,QOL指標)の使用法(国際委員会企画)より

静脈血栓後症候群 (Post-thrombotic syndrome : PTS) の病態評価で使用されるスケール

- Villaltaスケール
- Ginsbergスケール
- Brandjesスケール

- Widmer分類
- CEAP(Clinical, Etiological, Anatomical, Pathological)分類
- VCSS (Venous clinical severity score)

Villalta scaleの使用法の基準

- PTSの診断

各項目の合計点数が5点以上の場合、もしくはDVTの既往がある患肢に静脈性潰瘍がある場合にPTSと診断する。

- PTSの重症度分類(なし、軽度、中等度、重度)：合計点数で分類する。

- 0-4点；なし
- 5-9点；軽度
- 10-14点；中等度
- 15点以上もしくは静脈性潰瘍がある場合点数に関係なく；重度

- 連続的な指標としてのPTSの重症度

合計点数(0-33点)は、PTSの重症度を表す連続的な指標として使用できる。
なお、15点未満のDVT後の静脈性潰瘍患者には、15点を割り当てる。

Villalta scaleの評価と問題点

- 現時点でPTSの評価スケールで最も評価されている。
- 疾患特異性が高くない点、過剰診断になりがちである点、評価項目に正確性に欠く部分があるなどの問題点がある。
- PTSの病態を正しく診断、評価するためにはVillaltaスケール単独ではなく以下を併用。
 - 慢性静脈疾患評価スケール
 - CEAP分類
 - VCSS
 - 静脈疾患特異的QOL質問票